



勇士  
然婦

奇傳新話

卷

13  
3238  
2



へ13  
3238  
乙

昭和十年  
七月九日  
蔵

言傳新話卷之三

遊女確言秋山八郎立志存

人間乃正不正の性質の自然に由るや得道よりとよ  
らざるにありやあるに在る志と純一道に在る其  
節と舍してはあれと唱ふるといふも其は才皆不正  
切り多し又道と学をたんとて論辯に在り得ざる  
其は才抑のづらうといふにあり豈性質乃不正  
あるにありやば言自然とみくればを確然たるが  
おとくおれども道に在りては才正あり其は  
信せざるに由るの之と学をたんとては才正あり  
得る人乃善とらんといふ及んといふ人の不善

平山  
平山  
平山

園ていふはまはれいすむる去あり道は天地子備満ありて  
 ありぬれ人乃善不善の学もも学をざるか母のづりり  
 知り得る去れあはれとて道は化さるなり何ぞ人なる  
 性質不両ありとせん今むりともんぬ中以園東の執  
 權北条相模守貞時朝臣祖先の法則たすつと將軍  
 家と補佐して天下れ政成ゆ其法乃にせり其  
 乃賢ありと時様相應とて四海安寧なり其法大磯  
 の賢知子遊女と多く影えく娼家おとけく糸証  
 歌の朝雲にひび糸線女の暮雨と追ふ士類三民乃年  
 少あはれあはれ歡とけく一與とる集舎れ席青樓  
 に登るざるの事いぬく其席と終る事あはれと

多ん娼家れらに及父的多く其眉目乃廉一糸のこあ  
 だ種これ遊藝に達一或は書と讀詩歌及親縁するに  
 長らるもあり多うあうらに扇屋と中らんの家  
 に玉扇と子粉頭ありとる廉倉民家の子に知よ  
 といふ家につらえて父母も相繼ぐ死矣れを其家とん  
 とあえんそて子れとて養育し十四五歳に及びて容  
 顔端正風姿嬌くやうてたさやうなるのこあはれ知  
 たり書と好くよく文字紙知ふ其は東に先生とやん  
 して儒者ありて其文章ありて好んで書と学をせ  
 詩と作りて一歳修りて能く詩と作り墨跡を巧  
 りて書體其師の筆意を遍るあはれ人相奇と好

こそ親むるに堂上家よりして地下れ奇とひく自任  
 やする者よまて成らんく者貴歎ふ一はれを其名を  
 とかかれあく唐士西郊乃蒔圃とひく是成比一其歎  
 笑ひ建久の名娼虎とくとも何ぞ獨歩さる才とる  
 とくり其性質聰敏にしてさうら娼流子あるりと  
 て只主家れ大恩と報ずる成りく心と一其法と免に  
 る多ゆ一四海乃遊者其歎まを其才と兼ふて一  
 會さる成りく遊行の美とんあまらん其家徳は  
 く才出さるさるくも倍そ成大切乃者とせり其  
 あり難波津子かろまを其家富乃高家れ子孫余子  
 下りく一再青樓と禁まく玉扇子會一心情あれが

にとりも數回乃交會にひく益其情やむりあ  
 玉扇も數多き遊客の中は彼生が性質温厚寡言  
 にして才藝の伶俐あり成愛してま情成りくこれ  
 子遇はけ生在謙倉日久一とひく父母をさるに  
 て成々成せむ生いんともさるく一夕ありて歎成は  
 一玉扇子むらんく洞とあぐ我は地子あり名思議の  
 縁と結びてゆと角馴むとびて須臾も離れ心を  
 せんせん父母厳しく促して帰程成やう一む今一  
 袂とりらん乃耐子くまり我よく汝が心の二語あ  
 初らんく念生涯をある才あらん古今一を  
 父母に成りく必汝が才と子金に償ふく成我書と

多しとて一と云ふれども如より煙塵の多きとて數多の遊者風  
流乃甲に之を情相通とて始終夫婦乃物ありんも知る  
なりとて云ふれを我志うつて汝乃心とたが異公か  
を我ちうつて家婦とあはれ一先契乃人あはれ若くは  
ばあまは迷ふ一我ちうつて汝はくして其人と縁とむと云  
めんと云ひるに玉扇生が悲情其意乃一死と云ひて  
長嘆一歎して涙の才雨乃あはれけ地はあはれ遊者の  
智ありと云ふるも皆其身に半息乃實ありと云ふ只婦  
婦の誠と得んとしたと云ふ雲漢子拂よるがごとく離り  
これがたれん子情と云ひるまゝや又暗愚にして一男に情よめ  
て一息と云ふ小児乃其味子あはれむがごとくかくのぶと云

漢何人これ我をせんや其間子とて君のおとらぬ  
和にして才並あり娼婦乃情子降らばとて母のつら其  
情あはれつらむ我家の好むわらして妻久く思情  
と云ふ永く歎と云ふあんと思人を離別乃時忽つてか  
妻が心とてれく麻乃ぶとく只其かざりあき恩情肌  
骨にあはれ謝と云ふらば今悲情と云ふらば誠の心と  
らんと云ふ若くは喜けかればとら入るかと云はれとま  
せんとならば心か一今君妻と金銀子かえと婦とか  
若くは契乃人あはれを君又らつて汝はくして妻が情と云  
げあんと云ふその悲情恩言身とありして報つべら  
ば妻が心とて大切と思ふ実と云ふ競ば若くは高家と

一とぞも世々家高家にて人子あつるれ家あり忍との繼  
 とて娼婦と書とせん才祖先一對して汚名と氏族子及  
 びたぐ一且雙親変しては才許しあまうと志うれを不  
 孝のゆそれと姑とせん君の双親方一宥怒あつては才  
 ありとも忍乃氏族知青れ中一再は構はくそひなる  
 人もかあつたありとたぐひ子嗣子はくはとも心堂に  
 ぎらんや志うれを君乃妾と書はれ情の妾實に其  
 心忍乃才上とくりこれを放蕩の行子とら入るべ  
 かあつたはる思召止られく首尾然いひさかへん  
 て下向あつて再弟あつて歎とほくさぶ妾も公と安ん  
 ぶて情孤樂人と親終りて交然とて別をと便し

まふにけ生大子とのあつるごう感して何事もた  
 けりて書毎とひくあつてさう手帳と難はるべし  
 情く別函とくそてゆり志まふ半威解れして生が書  
 報得くひりたるに金銀をかえりて才と僕あつた  
 父母変してゆるさる事と述ぐて數月乃後かあつた  
 下向して相見く其情孤書と中書りらるに才  
 とかくあつた事ありらるに世もほまある信人  
 うかやうらうとくゆり賞羨とて指はるく其來會  
 の時返向らぬ月日とく一歳にわくして雁聲共  
 けたるく我方よりたくり書報も其報ふれば心  
 快くやして樂まだ志あつて笑ひ強て強ふとくかも



音  
言  
者  
之  
三

胸中常にあれと誓ふ漸く行きて書海に得てその  
 名を以て其の其人にあはれ親族乃内なるより其  
 おく生と傳ひあはれ相識乃人あり其人の書翰  
 あれを公卿とらひてむく死るるにかの生風邪に  
 さまじ疲氣甚しく京洛の名醫とほくはくしども  
 其より多くあく多子病死せり死に臨みて我殺し  
 て後かあはれ玉扇へはま海を運ぶに居るといふ  
 の遺言にそとの愛とあはれするよりほく送物も多  
 ありま玉扇をえだ一夜呼びて地は倒るるに其  
 子やせらひてこれと補け醫茶とりらひて孝た  
 かりま玉扇よりそとて二十七日の喪にあたり寺院に

よんそ石碑と建て供養とほくして冥福といのり  
 みづうりま玉扇とあげらるるそとと營ご百十日  
 にあはれそ同門乃和舟れな十人とあはれあつめ  
 袂とそとめ追善の和舟と誦ぐそととよ向其來  
 客に一同引出おしそかの生が慈恩と報らる玉扇  
 が方すそといふそとや婦女にそと丈夫あり者り義志  
 乃ゆとせしそ世の女に少くそに勉むるそとあり其  
 比京の神奈庭に嘉儀ありてお軍家より使使と  
 て秋田城を助と上洛をさしむは秋田氏寛活れして  
 驕奢気好いそ度の上洛榮れ使節ありとして家士  
 お立ふれ奉福とあはれそと且金銀と下して西これ衣



東馬鞍下乃出立までちうく成はくして義麿子打  
 まぶさ命トきれをさう入母ごりにきる人懐け命  
 今子欣然として名風流とてちうく出立せり出  
 是乃日ハ鎌倉中群集ふか一若次大磯乃駅まで旅鋪  
 とかすえんくこのゆ粧こんんと若男女狂なるがどと  
 くはせらぐらぬ貞時刻長けたけりむさ成園く大子あ  
 中このいれ我家代と儉素致りてゆ跡とたきうふに  
 け度秋田が驕情の旅粧何ぞやと心中と恨一のよ  
 而に横目の者ひそに上まきもる城を助を来大磯  
 の娼樓に遊んで玉に解とつる遊女と露遇してけだの  
 上京綺羅をかたりて其ゆ粧と彼もん存て誇らん

中の結構ありとてらんえんれを貞時刻甚懸望あ  
 りく世の中流季とありて法と守り儉と而たてん  
 ども家門のちうりかたれぶと死狂人乃ゆとあん  
 嗚呼やんねるかかと涙と流一のひららが秋田氏政府  
 乃後しそらに諷諫ありんれを城を助懐きたる法  
 悔して其ゆ事とあつたためきるやありけ附玉扇と主  
 翁乃命に志さぐらとく容儀とてかた夜裳とかがりさん  
 あさに知くたまふ目送りまゆりてやきる世乃中  
 もんうのたまふとてこくつるある石測の災難ら出来あん  
 鎌倉の大身天下れ圓めともある人乃かたれぶと死狂  
 態とあまかたりてんれを懐乃を極かあむとあ

乞義笑かぬ秋田氏出立の目小糸宗宣乃家長秋  
山多博が牌同名八郎信勝とつる者有明勇烈子  
て眉目画々うらやましくある世果をうりれ勇まき  
抑子亦まり改政海をいれとくまゆり途申に  
碎狂乃士七八人子出會せしに彼碎人よと云と  
藉に及びたれを八郎自己乃伎倆子ゆをそ一人  
と國許よるび暫時子八人と切伏より根藉者士  
に彼急あんとたれい亦控の制あれば先の相  
あれを竹のこりりあくまきとあんとあひに衣八人の  
内二人の糸宗方の下卒に宗方版あり人か  
是はさぬぐれりりまことわり父を備八郎と勤尚して

其の意よすまぬけ八郎信勝せんよあく二君子は  
志もあけまば常に大儀の娼楼子徘徊して其任使共  
え来信勝が室にありと信びてとんとたんとし師と  
称しれば信勝下知して順弱ありとたすけ果強あり  
と打擲をいれんとは跡にかりれば娼家にも是  
よろこんでおれぬあつとつう信勝とまじり  
ふ八郎が形容羨麗あれを娼婦も浮氣の情とつて  
そはいどむとんと信勝一ととまじり或時  
屋にそ祖先乃佛ありて達長寺れを和尚召  
物して冥福といのり信勝とたのこそそを  
せしむ養應の間信勝才明あろう佛理も悟きれば

席上乃詩話も真ありて和尚少くも其氏祿一詩賦  
の端もあつて和尚乃曰唐の代は樂府と絶句に作りて  
風流の流びとせり我國未詩風ひもきん只宋儒の理  
屈乃詩と詩と思つらど母らうあれ負道唐士にあり  
附唐の王昌齡が絶句李白にあつて温厚風流あれ  
をば詩と學び會したりと昌齡が青樓曲之首と  
あえく其詩素と述らふに一座耳とらへ一信勝殆  
感心して昂座に一絶と賦に

秋風病起倚新粧隨例歌吹心自傷  
誰謂柳絲能繫客垂垂唯為一人長  
和尚とんとんとく大子賞美ありて足下ハ識子才子か

其調宗の祿にあつたと評しとふに其も真と信  
して玉扇とよみて信勝の詩とんせ側の扇面より  
させらるに玉扇は詩と吟じて暗子我意に符合するに  
感して臆とる及く後容として毫と揮ひ筆勢  
雲煙とらうりて書一終りまゝに呈しられば  
あまこと和尚もなり一座驚嘆して実子王右軍にせ  
まなりと稱しね和尚も後ひまの一傍たむむれて曰  
信勝君玉扇と羨慕相對一々藝相敵んと云ん  
をハ部才子恥入り玉扇も面と掩ひ思らば信勝と目  
と見合せ既子意情乃縁とむすべり席よりて  
返さく信勝快くして矢張りあわらぶとよく

考へんを玉扇が教へた才藝に情急のせまらふあり  
らんが我十七八歳より今日に於て眼子婦人女子と  
らんを竟た情と動いたるゆゑ今日玉扇と信ん子  
見かくれおと情急と引くお中むととあひあ  
とてともお情急とが其意額なるごとく書きてあ  
て猶りらるに彼も其日より情急よりいへていま  
だ顔子あつたごとく其書とらん措りあつた  
遊女とあつたは情急子叶ふ人と相あれ情急諸人  
もけりがごとくあつた情急かるとあつたかた  
さ才藝容貌並びすれらる年又あつたとも  
竟んだと竟ん返書してられよりあつたあつて日を

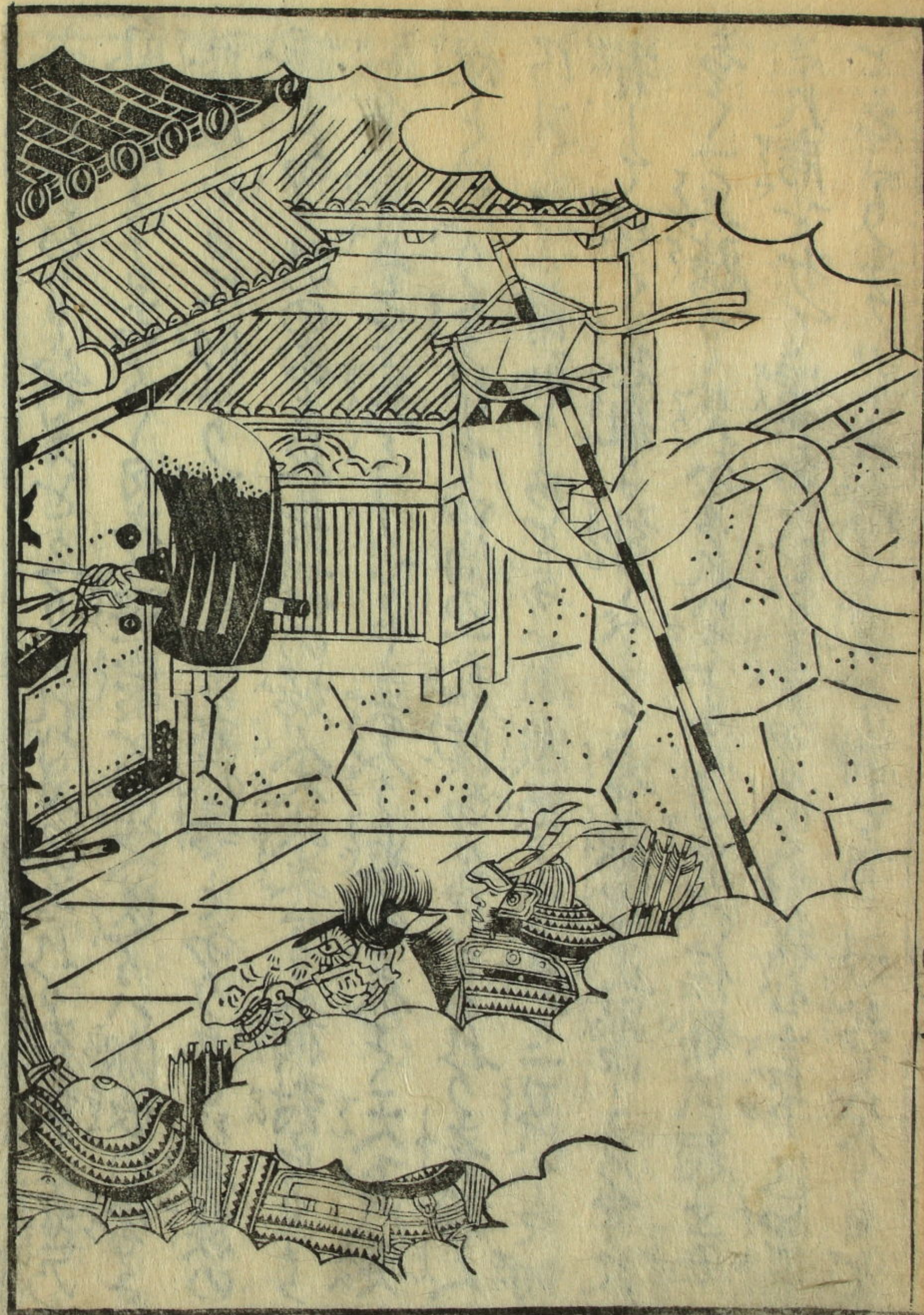
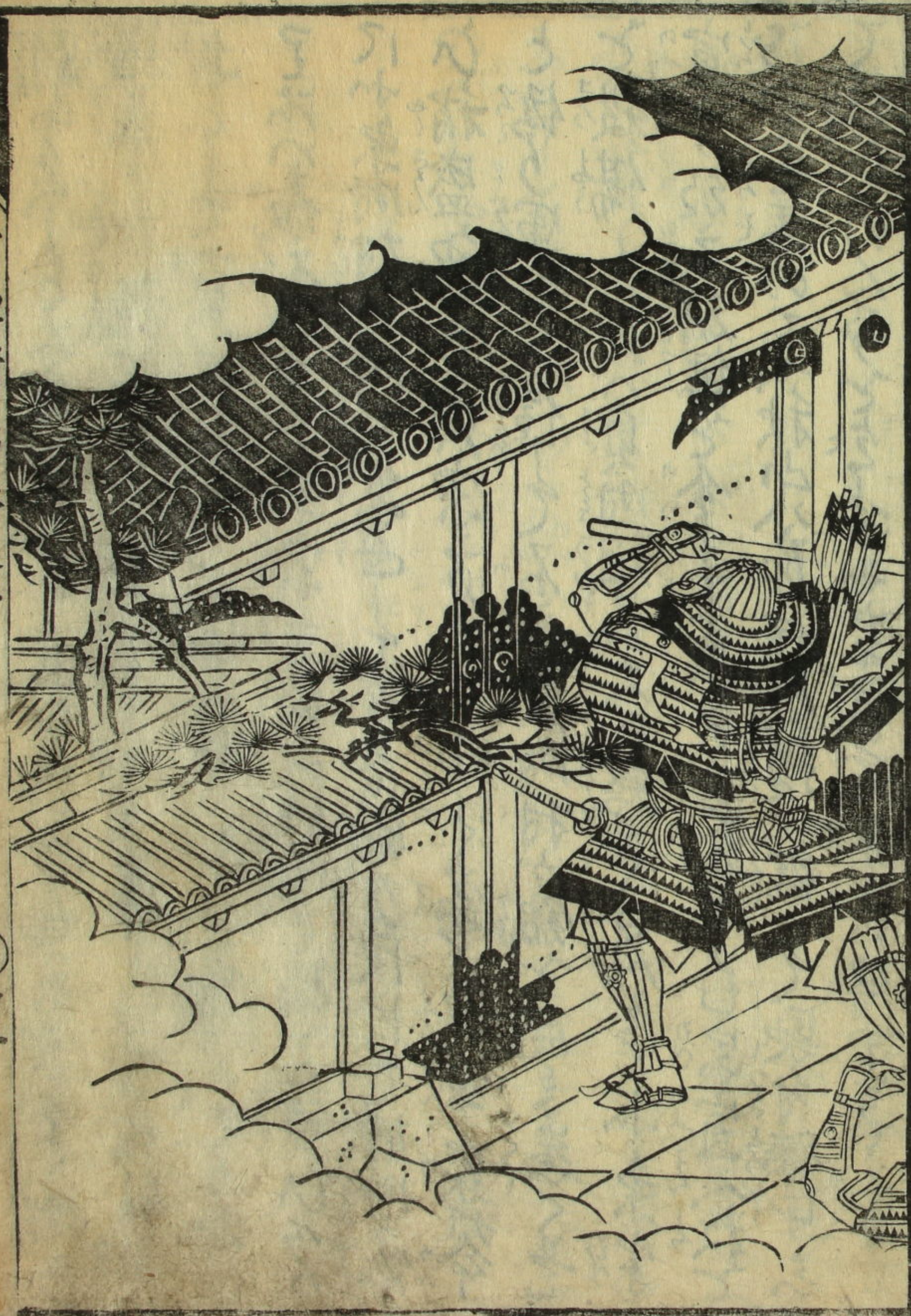
遊ひ月とよごとく一發麻して其地より宛るるに  
其のちやどありて信勝が父を請かすより密書に  
あつた小糸氏族乃ちらに妻ありて小糸宗方同氏  
時村とせめあつたにゆゑ主人宗宣との討を  
義りておたんとんは討をせめあつた必赦免あつて  
我勘當もたのづかうゆゑ早く馳系あつた  
少ありきんを信勝は討玉扇子情急蕩り精紳  
荒洋とて父の恩免と情急とあつた黙して考思  
あつたと玉扇あやして父乃書翰と請てたよれ  
どうりこそ殿回天乃討つたり討も遅疑あつた  
さまにあつた早く馳系あつたあつたあつた信勝

千傳行活巻

〇五

曰我身の幸は上あさるるよりよくある得るといふ  
 汝と今別れんより才と裂くよりも苦くあはせん志  
 存とあげらうて生涯汝と世にたのしむんとあつた  
 汝より我よりよくあつたやとつたに玉扇を速り威候と  
 め汝の此言何とつたよとより發せしや人間ハ二やうな  
 是れども口をきて士氣へ甚存と生涯乃義同とん今  
 公之馳系あつて関許は越さぬの勇威とぬく敵と  
 破るべしとてぬく敵もあつてぬく切早て將軍執  
 権乃賞とうけ君父の戒と解ひて父母と書い又上  
 に奉仕したれ乃能事此うくはわらんやつづらに  
 一人の遊女のたために情と断事あつた大才と能ん

とん其のころ我身とつてそれれは空なる能く善乃  
 風にあつたすまぶとく日夜遊宮と運送るハ謝汝の常子  
 轉環とるに似たり朝子の源家れ妻とあり女子ハ平族の  
 婦とあるかのぶと死矢操の婦丈夫夫る人相對とるす  
 船ハ況はとてなするとや妾今速敵とぬく天下は英  
 雄とあつり今にて四海の二疾漢あるゆと志れり妾婦人  
 けり汝より角恥うめとよみ敵激怒して妾と刀れ下り切  
 害して早く急難子部とと容貌端正服中よりあつた  
 志く一息喘ぐと笑あつたんばえ東智勇れ信勝は朝子  
 さん席を打て賢あつたか勇あつたかお我公言下に  
 とあつたりまあつた六形く思と難と下討死せば今日



別あるべしと力押さく立おれば扇其候きく側乃  
 勝魚と打絶と多く喜情を送りたるとて信勝先  
 おとくと古乃巴静行を汝子増んと云捨くをり出た  
 己比の越え三多小宗宗方同氏時時と権と静ひなる  
 己小宗時村時時と更過しては公助なるに因て時時時  
 ひ稍盛ありなる公宗方太子憤く逸子將軍家丸命  
 と偽り軍勢と偽して不意に時村が鉦と因て悉く是  
 と殺傷しこれに貞時朝臣太子怒くさるる小宗宗  
 宣宗が文朝総と令して宗方と伝せしむ宗宣人殺と  
 沙て出馬の西秋山八郎信勝鎧一編して馳行膝甲志  
 て信ひりんとて小宗宣喜で平士の得中とく勇士

はあご一汝四をれ難子却くは公助きんと其志子免  
 して石連く一と有れは父を清も八郎も涙と揮く思公  
 謝し孝子宗方が郎子押さるるに兼て是情の宗方人  
 殺と拵て防戦するに教かりたるを宗方も暫時たき  
 多きしてたあふふ西子秋山信勝大なる券と拵きて礼儀  
 の間とま切子馳入券振上る門の扉と三ツ三ツおよと刀之  
 一がわをもちまうて扉たを子周たり歎勢膽と冷しなる  
 せ扇をよとあふりかると券を車一敷るに是子尚ふ  
 者二人三人打倒されずとあるか一群合引笑ふありあを  
 宗宣朝総のあおま先子宗方と下知るは經子惣軍  
 氣子宗方と一同子こ入庁端より難るに歎軍八方

に散礼して宗方せんごころて書子と名教し自教せんとか  
まよふ秋山信勝馳付て礼義と心し意子其首と討え  
て逆徳一尉子滅してあおぬ陣ありられば貞時朝臣さうご  
の功と賞し秋山八郎が働を比類なられば賞美の誥文  
と給り勇名実た子報せり宗室も敏子海り誌士と稱し  
よけて信勝が勇威と感賞して別子奉流と給り父と去  
に家司と命たり信勝一刃の勇武忠孝を今よとて此宗  
とらる事まうかぐら皆玉扇が誥後よりありらればあ  
其志と感し父母に對してあふに其志と語り某彼が  
教とにあらう今又得く書美とあふ子公か一其謝と  
述さんばまうかぐらあありとやられは父も玉扇が確

論と賞し信勝が其情と斷事と恨んぞ人ごとく書子玉  
扇が身と金銀子償めて何方ありとも父の流りとあは  
だ一と扇屋のうらぬ子誥後らにうらぬ子悦と玉扇と呼  
びく其志と語りきれい玉扇笑て八郎君の世の英雄あり  
賤娼の詞と用て英名とあらしめり而て自ら誥と感し  
て其報をかさんとて未練の意情一点もか一勇士か  
か不願くいかれむと死英雄子後と書とあふ六婦とる  
たの大事ありんまくれも一刃と捨て生涯と伝んと意  
惜せし難波の商家の子ありけ人殺して異人の婦とふ  
らんの心か一秋山君の志の感謝子たえは書が事誥  
あは廿四歳娼流全盛の時あり只は後らしく前生の



報と果して數年れ後又志た不わりとありて辭し  
 きれんるも其言と似て秋山へ逃りたる情益  
 感心して竟子其黄金とて子贈り後來玉扇が  
 生活子傳くよとありりれんるも子と似玉扇と  
 家の幸と悦びてあるはうけ押さめたる玉扇は使  
 氣義子立の烈なる婦女に之英雄の志氣あり  
 夫婦中れ傑ある者其後玉扇が約束のあり  
 仍きん知る者ありり一やあり

奇傳新話卷之三終

